かぐらおか

（題字は初代学長　山田守英氏）

第112号

平成15年3月22日

編集　旭川医科大学
　　教務・厚生委員会
発行　旭川医科大学教務部学生課

旭川冬まつり　（写真撮影：学生課　細木和比古）

卒業生を送るにあたって ……久保　良彦…… 2
「わたり世紀に学んだ」25期生の皆さんへ!! ……葛西　眞一…… 3
贈る言葉－人格的成長とユーモア－ ……岡田　洋子…… 4
卒業にあたって～国試を目前に ……金井　麻子…… 5
「私も仙台行きました」 ……鳥海　尚久…… 5
今、思うこと……澁谷　貴史…… 6
医学科第25期卒業生名簿 …… 6
卒業にあたって ……笹川　絵美…… 7
卒業にあたって ……田仲　里江…… 7
看護学科第4期卒業生名簿 …… 8
平成14年度博士・修士学位授与者名簿 …… 8
夕映えの大雪山系 ……谷口　隆信…… 9
救急部教授に就任して ……郷　一知…… 10
教授就任の御挨拶 ……松浦　和代…… 11
教授就任の御挨拶 ……奥村　利勝…… 12
一年を振り返って ……二村　麻美…… 13
一年を振り返って ……安藤　義崇…… 13
「1年を振り返って」 ……片寄さやか…… 14
「今年1年を振り返って」 ……原谷　俊治…… 14
研究室紹介 …… 15
外国人留学生冬季交流事業実施される ……15
平成14年度　1年のあゆみ …… 16
クリスマスコンサート　3題 …… 18
新入生歓迎合宿のご案内 …… 19
平成15年度日本育英会奨学生の募集について …… 19
学生教育研究災害傷害保険について …… 19
医学生教育研究賠償責任保険の加入について …… 19
平成15年度前期分授業料免除及び延納・分納について …… 19
教官の異動 …… 20
窓　外 …… 20

卒業生を送るにあたって

― 変革期の狭間に思う ―

旭川医科大学長　久　保　良　彦

年中行事とはいえ、大学の年度末は何かとあわただしい。年が明けて間もなくおこなわれる大学入試センター試験から、推薦入学者の決定、一般選抜二次の前期および後期試験と一連の入試が続き、新しい入学予定者のリストが整ったところで、学位記授与式を迎え、その年度が締めくくられます。

学位記授与式、それは卒業する者にとってまさに新しい出発です。それぞれが限りない可能性を孕む前途に、さまざまな夢を抱き、ひたすら前を向いた旅立ちをする日です。

一方、送り出す側は、むしろ後ろ向きで、共に過ごした時を思い、あるいはいわゆる本学の製品としての卒業生に対する世間の評価はいかばかりかと気にかけます。

「知の時代」といわれる21世紀に入って２年が過ぎ、さまざまな分野で変化が加速されているように見えます。身近なところでも、先ず国立大学が明年(平成16年)４月から法人化されます。本学は「国立大学法人旭川医科大学」が設置する大学ということになります。

国の行政組織の一部であった国立大学が、大学毎に法人として独立した存在になります。これまで〔研究・教育の〕自由・自律は認めながらも、国は国立大学全体の運営の舵をとって面倒をみてきたのですが、これからは大学それぞれ保護者の手を離れ、自分の責任で歩いてゆくことになります。その足腰の強化のためということで国立大学の統合・再編が計られていることはよく知られている通りです。いずれにしても、大学の最も大切な使命である教育・研究機能を向上することに繋がる改革でなければなりません。国立大学の法人化はわが国の高等教育のあり様に大きな前向きの変化をもたらしてくれるに違いありません。

近年の飛躍的、加速度的な生命科学の進歩は、わが国の医学に革命的といえる変貌をもたらしております。その一方で、経済の低迷や少子高齢化などの社会基盤の激しい変化により、わが国の国民皆保険制度下の医療はかつてない変革を迫られております。医学・医療は大きな変革期に当面しているといえます。

このような推移と無縁でないのが、医学教育改革の気運であります。医学という実学の教育にふさわしい内容になるように、教育手法の工夫と共にカリキュラムがよく吟味して選り分けられました(コアカリキュラム＋選択カリキュラム)。

また、臨床実習は、従来の１年間の見学型から実質１年半の診療参加型となります。さらに、これまで努力義務とされた卒後２年間の臨床研修が、明年(平成16年)４月から義務化されます。これらの改革は「ありふれた疾患をしっかり診断治療することができて、いつでもどこでも緊急の事態にきちんと対処できる医師」の育成という社会の要請に応じようとするためです。

このような医学教育の改革はわが国で国による医学教育が始められて以来の大きな改革になります。

この春の卒業生は医学科が25期生、看護学科は4期生となり、それぞれ92名と65名を数えますが、これらの皆さんは丁度わが国の国立大学あるいは医学教育の変革期の狭間にある思いを強く持たれていると思います。

しかし、人類の歴史の中で例をみないといわれる医学の急速な進歩が続く時代にあっては、医学・医療の激しい変革はさらにこれからも続くでありましょう。皆さんはその真っ只中にいて、否応なくその変革に対応し、医学・医療を通じ社会に役立ってゆかなければなりません。

そして、いかに医学が進歩し、医療技術が発達しても、また医療をとり巻く社会環境が変化しても基本となる条件は不変です。それは本学の教育理念の中核である、人間性(ヒューマニズム)を基盤とした人間の信頼関係の構築で、いつの世にあっても医療の基本であることに変りありません。

皆さんが旭川医科大学を卒業したという履歴は生涯ついて廻ることはいうまでもありません。本年11月５日には開学30周年を迎えることになりますが、これまで2,700余名に及ぶ先輩が営々として築いた本学の評価はすこぶる高いものがあります。

皆さんは本学出身であることを誇りとし、社会において本学の評価をますます高めるようご活躍いただきたいと願っております。

卒業生の皆さんのご健康とご発展を心から祈念いたします。

「わたり世紀に学んだ」25期生の皆さんへ!!

医学科第６学年担当　葛　西　眞　一

25期生の皆さん。御卒業おめでとう。心からお祝い申し上げます。私にとっては皆さんが初めての学生担任の経験でもあり、また、我が家の子供達も、丁度同じ年頃でしたのでとてもひと事とは思えず、あなた方にとっては多少煩わしかったかもしれませんが、何かと気になるこの２年間でした。５年生の新学期にひととおり皆さんに面談したときには、何とか全員がスムーズに卒業してくれればと願っておりましたが、７人の諸君の足踏みは残念です。

振り返ってみますと、1997年に入学した皆さんが旭川医大で勉強している間にも随分色々なことがありました。最大のイベントは、世紀末と新世紀のわたり世紀に居合わせたことでしょうか。何がおきるのか異様な緊張感の中で時が過ぎつつあります。私たちに関係することを２～３拾ってみますと、かって経験したことのない少子高齢化社会が進み、子供の人口は全人口約１億2,500万人の15%を下回り、老年人口が15%を越え、とうとうその割合が逆転しました。このことは、今後の医療の本質にも大きく影響して来ることでしょう。

次に脳死臓器移植法が制定され、約40年振りに脳死臓器の摘出とその移植が再開された事をあげます。皆さんにも折に触れ意思表示カードの意義を訴えてきましたが、現在までにまだ20数例が報告されているに過ぎません。肝臓についてみますと、皆さん御承知の生体部分肝移植が2,000例を突破しました。一時的にせよ健常人に傷害を与えて成り立つ医療ですが、新世紀におけるひとつの新しい形態として考える必要があります。

ワトソンとクリックがDNAの二重螺旋構造を見出して約50年が過ぎ、とうとうヒトゲノムプロジェクトはほぼ完遂されました。さらにクローン技術が完成し、マウスのような小動物から牛のような大動物まで、クローン動物が続々と誕生しています。西遊記の孫悟空が自分の体毛から無数の分身を作り出すという妖術が現実となったことは、極めて衝撃的なことです。ワイドショー番組の話題ならずとも、ひょっとしたらクローン人間がすでに誕生しているかもしれません。禁断の木の実を食べてしまった人間は、もはやセルフコントロールが効かなくなってしまったのでしょうか。この他に、生命事象に関する事柄をキーワード的に挙げてみますと、人工授精、代理母、安楽死、尊厳死、遺伝子診断と治療、再生医療など、どの言葉をとってみても大変難しい問題を内包しています。

皆さんは入学以来、医学、医療に関する実に膨大な知識と科学を支える生命倫理について十分に勉強してきました。いよいよ、これまで学んだあらゆる知識を各人の責任において実践することになります。臨床実習で見学し、時にチームの一員として参加し経験してきたことを試す時が来たのです。試すといっても、私達の場合は、誤ちが重大すぎる結果を招いてしまいます。昨今はちょっとしたことが医療訴訟、医事紛争という、出来れば遭遇したくない事態になりかねません。私達は良かれと思って事に当たる（診療する）わけですが、結果によっては全く受け入れてもらえない残念なことになることも時にあるものです。誰しもこの様な事態は避けて通りたいものですが、そんなラッキーなことは期待するべくもなく、多かれ少なかれ体験するときが来るでしょう。どうすれば良いでしょうか。「誠心誠意事に当たる」という誰もが知っている古くから使われている言葉がありますが、恐らくこれ以外に難しい事態に対処する方法はないでしょう。簡単なようですがなかなか大変なことです。医療は１人でやることは皆無といってもよく、従って、日頃から良い人間関係を作っておくことが大事です。

皆さんは、命を扱う事を国民に付託された特別なプロ集団の１人であることを真摯に受けとめて、さあ、いよいよ出発しましょう。Good Luck!!

（外科学第二講座　教授）

贈る言葉

ー 人格的成長とユーモア ー

看護学科第４学年担当　岡田洋子

御卒業おめでとうございます。皆さんにとって大学生活はいかがなものだったでしょうか。大学生活を通して１看護師(医療者)である前に一人の人間として、良きモデルに出会うことができたでしょうか。学びの成果を発揮するのも、またその真価が問われるのも、人生の本番であるこれからです。良き人々と出会い、幸せな人生を歩まれることを祈って、日頃私が大切に思っている人格的成長とユーモアについて、述べさせて頂きます。

私は、看護師になったばかりの頃、上智大学教授でイエズス会の神父でもあった、今は亡き小林純一先生と出会いました。今日の私に何らかの影響を与えた人物のお一人です。先生は、社会的成功(地位)をおさめた人の中にも、自己実現している人は非常に少ないことを話され、自己実現の難しさを著書の中でも述べておられました。その頃の私はあまりその意味が分からず、「そうなの?」といった程度の理解でした。しかし今では私の「座右の書」の一冊となり、折につけ私に生きる「方向性」と「勇気」、「平安」を与えてくれています。私の、人間に対する関心を開眼してくれた出会いと言えるでしょう。皆さんは４年間の大学生活を通して、幾度となく「自己実現」という言葉を耳にされたと思います。この自己実現という言葉を、どのように理解されましたでしょうか。先生は、A・H・マズローの著書である「人間性の最高価値」を引用して「自己実現している人の行動的特徴」を次のように述べています。

ー自己実現する人ー

(1)不安や恐怖のために自己防衛に陥らず、成長への道を選ぶ。
(2)表面を装わず、真実の自己に誠実に応える。
(3)自分自身に耳を傾け、他人とは異なる自分に正直であろうとする勇気がある。
(4)買い求めたり、他人からもらったり、探し求めたりすることでは得ることのできない真・善・美の至高体験をする。
(5)自分が何者であり、だれであるかを発見し、自分がどこへ行き、使命が何であるかを見出す。

一方「自己実現していない人の行動的特徴」を次のように述べています。

ー自己実現していない人ー

(1)自分の先入観や価値観にとらわれ、これに振り回される。
(2)自己の確立がなく、本当に自分がしたいと思うことを自由に決意して行動に移すことができない。
(3)上の者や権威者に追従することによって安心を得、自己責任がとれない。

もう一つ小林先生から影響を受けたものに、ユーモア(自分を笑う)のセンスがあります。先生はユーモアの大切さに触れ、ユーモアは人間の感情の世界と深く関係していること、言い換えるとユーモアは、人間性に触れるものであり人格的なものであると述べています。人間の「言葉」は、単なる知識や語句の操作だけで生まれてくるものではありません。その人自身の人格的なものと深い関係があり、心理的に健康な人々は、他人を軽蔑したり傷つける言動を好みませんし、そのような皮肉や冗談には心を痛めることはあっても好んで笑うことはありません。また、多くの限界の中に生きている自分を知っている人は、自分を笑うことができると同時に、自分を愛することができます。成熟した人は、自分を笑うゆとりがあるのです。皆さんの回りを見渡してみて下さい。素敵に生きている人の特徴に注目すると、頷けると思うのです。いかがでしょうか。

私が社会に出て間もない頃に影響を受けた出会いについて述べさせて頂きました。大学はご存じの通り、研究と教育を通して、人を育成すること・地域社会に貢献すること、の二つの機能が求められています。つまり現実社会は、豊かな人間性が求められると同時に、「テクノクラート」的要素もまた存在します。今日のテクノクラートとは、ゆだねられた課題が何を目的としているかを問わず、それを行なう上で理念や思想をもつ必要もなく、ただ上から・外から与えられた課題に向かっていかに能率的・機能的・効果的に組織をあげてとり組み目標達成に力を尽くすか、その技能・統率・管理の専門的技能を持った人間を意味します。テクノストラクチャーが進むと言われる管理社会の中にあって、「生」や「死」といった人間の尊厳と深くかかわる看護師になる皆さんに、ぜひ期待したいことがございます。それは第一に、どのような状況の中でも主体的に思索し、自立的に行動できる人間、第二に、いかなる権威、いかなる権力に対しても、常に今ある場所から一定の距離をとって、その正体を疑い、抵抗できる精神を持った人間、第三に、いかなる事象に対しても、歴史的視野の中で冷静に相対化して観ることのできる視点を持った人間、であってほしいということです。言葉にするのは簡単ですが、実行することは大変難しいことです。でも忘れないで下さい。ユーモアのセンスとともに!

喜ぶ人とともに喜び、泣く人とともに泣こう。どんな人に対しても悪を悪で返してはいけない。
ロマ12・15、17

（看護学講座　教授）

卒業にあたって～国試を目前にして作りにいった思い出

医学科第25期卒業生　金　井　麻　子

国試まで１か月ちょっとになった平成15年２月１日、私は学校で一緒に勉強している友達と仙台にいました。１日飛行機乗り放題を利用して、牛タンを食べるためにやってきたのです。

日帰りということもあって仙台滞在時間は約７時間半、目当てにしていた牛タン屋の１軒は休業時間とぶつかってしまったために食べることができず、合間にいった青葉城址・松島観光も中途半端に終わってしまった感がありましたが、それもまた楽しい思い出になりました。

慌てて空港に戻ってみると新千歳行きの飛行機はDelayed（遅れ）になっていて、さらに悪天候のために羽田空港に着陸することがあります、というのです。「せっかくだから東京で一泊するのも悪くないよね」とみんなはむしろ楽んでいるようでした。

みんながそう言うまでは、私自身は東京に行くかもしれないなんて、困ったなぁと思っていました。そもそも、こんな国試前に旅行するなんて(風邪引いたりするかもしれないし)とんでもない!!と考えていました。世の中にはいろんな考え方があるのだなぁと思いつつ、みんなに強引に誘われなかったらこんな楽しい思い出は作れなかったよ、とみんなに感謝の気持ちで一杯になりました（チケット取るのも任せきりだったし）。

「やっぱりあの牛タン屋で食べてみたかったね」
「また仙台に行って、今度こそ食べたいね」
「みんな忙しくなって、今度はみんな一緒には行けないよね」と話すうちに、本当にみんな全国にバラバラになって働き出すのだなぁと急に寂しい気持ちに襲われました。就職試験を受けに行った友達もいたから、そんなことわかっていたはずなのに。
それ以来、辛いはずの国試勉強もみんなと過ごす残りわずかな思い出作りのための大切な時間であるように感じられるようになりました。

「私も仙台行きました」

医学科第25期卒業生　鳥　海　尚　久

お盆の頃になると、全日本医科学生オーケストラフェスティバル、通称『医オケ』が毎年全国のあちらこちらを、場所を変えて開催されます。全国の主に医療系の大学・学部から、たくさんのオケ好きが集まって、１週間ほどの合宿を行ない、最後に演奏会を開くという一大イベントです。合宿中、昼は練習、夜は宴会という学生らしいスケジュールで大きな曲に挑みます。

旭川医大のように単科大学であったり、医学部キャンパスだけ隔離されていたりすると、大規模なオケを編成できません。そこで、参加者の多くが自分の大学のオケではできない大編成の曲に取り組むために、全国から集まってくるのです。参加者のレベルも、プロ並みにうまい人や本当にプロになってしまった人もいれば、大学に入ってから楽器を始めた人や東医体帰りにやってくる人まで、実にさまざまです。

医オケの醍醐味の半分以上は、毎晩パートごとに分かれて朝まで飲みまくる飲み会にあります。基本はパート飲みですが、他のパートを飲みに回ったりするほか、弦楽器が集まる『弦飲み』、管楽器・打楽器の『管打飲み』、同学年で集まる『学年飲み』など友人を増やすチャンスはいくらでもあります。指揮者やトレーナーの先生たちから業界の裏話を聞くのもなかなか面白いものです。

そして、演奏会。体調を整えるために、前日は飲むのをやや控えます。開演直前の舞台裏では、パートごとにバナナを食べたり、栄養ドリンクを飲んだりと伝統の儀式で気合を入れている姿がみられます。演奏会が終わると、大きな感動と達成感の中、全員で飲みます。朝まで飲みます。そして、宿のチェックアウトの時間に追い立てられるように、三々五々帰途につくのです。

こうして全国のたくさんの知り合いと、たくさんの思い出が、大学生活だけでなく一生の財産となっていくのです。

どうです、あなたも参加してみませんか？

今、思うこと

医学科第25期卒業生　澁　谷　貴　史

卒業できることが決まり、私の6年間の大学生活にピリオドを打つ時期がそろそろ近づいてきました。今、感じていることを率直に表現すれば、「嬉しい」の一言ではないでしょうか。毎年繰り返される進級発表。今度は留年してるんじゃないかと怯えながら、独り真夜中に家を出て、発表を見るまでのあのなんともいえない緊張感。終りの見えない、果てしない試験地獄。「もう、辞めてやる」と何度唱えたことか…。ああ、医師になるとは斯くも苦しいものなのか、と思う日々から卒業できるかと思うと、なんというか感無量です。

このように、私にとって「試験」というものは非常に苦しいものでしたが、そこから得たものもあります。「知識」と真っ先に答えられないのが残念ですが、それよりもっと大切なことがありました。それは「人」です。苦しい時を一緒に過した仲間や、相談・愚痴に付き合っていただいた諸先輩方、頑張ってと声をかけてくれる後輩達。今、私がこうしてここにいられるのは、彼らをはじめとした様々な人達に会うことが出来たからこそだと思います。他のどの大学でもなく旭川医科大学に、25期生として在籍できたということが本当に良かったと思う理由はここにあります。「人」に恵まれたことが、大学生活で得た最も大事なことではないか、と今改めて感じています。この場を借りて皆さんにお礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

最後に、私の我が侭に最後まで付き合ってくれた家族にお礼を言いたいと思います。この8年間ほど、両親・兄弟に多大な苦労をかけてしまいました。それにもかかわらず最後まで私を応援してくれたことに本当に感謝しています。

順調にいけばあと数ヶ月で私は医師になるはずです。仕事柄多くの人と関わっていくことになりますが、一つ一つの「出会い」を今まで通りに、そして今まで以上に大切にしていきたい、と考えています。

卒業にあたって

看護学科第４期卒業生　笹　川　絵　美

卒業まで、もう残すところ国試のみとなりました。16年間も使った「学生」という身分を、もう捨てなくてはなりません。卒業すると、学生から一変して「社会人」に分類されてしまう事を考えると、予定通りでありながら、あまりに急激な変化のように感じます。そんな心境からでしょうか、最近気になるニュースがありました。それは、今若者の離職が進んでいるというニュースです。これには背景の一つとして、現代の不況の中、自分の希望の職業に就くことが出来ないということもあるでしょう。しかし、もっと根本的な問題として、「自分なりの仕事観」が出来ていないということがあるのではないでしょうか。

思えば私自身、自分にとって仕事とは何であるのか、ほとんど考えてきませんでした。そして今、仕事とはなんぞやと考えるとき、思い出すのは幼稚園で「将来の夢」を書かされた経験です。将来の夢について、「お金持ち」「偉い人」などのやや抽象的な回答をする幼児もいましたが、多くの幼児は、そして私も、将来なりたい職業名を答えていました。つまり、私の将来の「夢」、つまり実現したいことには、「仕事」の要素が入っていたのです。そうすると、やはり自分にとって仕事は、「苦痛」であったり、また、余暇の価値を相対的に上昇させトータルで考えると人生にはメリット、というだけの物ではないと感じます。

現代では、マルクスの言うところの自由の国は彼方にあり、仕事はまだ必然として存在している部分が大きいと思われます。しかし、病は気から、苦労も気から。「仕事」が単なる必然ではなく人生の糧となるよう、自分なりの仕事観を形成し卒業を迎えたいと思っています。

卒業にあたって

看護学科第４期卒業生　田　仲　里　江

自分の看護の幅をさらに広げたい、という思いを胸に、私が旭川医科大学に編入してもう２年が経ちました。大学は、看護の専門性を多面的に検証し、今後の看護のあり方を、そして自分自身を模索する、そういう場所でした。編入生である私が受講した講義は、専門基礎科目や教養科目、保健師になるための地域看護学が中心でした。そのため、３年生のときは詰まっていた講義も４年生になると週２～３時間ほどしかなく、自由になる時間を利用して看護師のアルバイトをすることもできました。臨床経験のない私にとっては、このアルバイトはとてもよい経験になりました。また、医学科と看護科の合同の教養科目はとても新鮮で医療技術短期大学部との違いを感じました。

一方、部活は私にとって大切なものでした。水泳部では道医体や北医体に選手として参加し、東医体では応援に行ったこと、また、恒例行事である道東ツアー、襟裳岬での合宿は最高の思い出です。さらに、兼部していた茶道部や華道部では、週１回の練習でどんなにか心を落ち着かせることができたか分かりません。そして、編入生の仲間で過ごした時間もまた、かけがえのないものでした。これらの多くの人との出会いは私の貴重な財産であり、これからもずっと大切にしていきたいと思います。

そしてなんといっても、旭川医科大学で学べて、充実した学生生活を送ることができたことを本当にうれしく思っています。

卒業後は、これまでの勉学で身につけた看護観を大切にしながら、少しでも社会に貢献することを心がけたいと思います。時には壁にぶつかることもあると思いますが、そんなとき、これまでがんばってきたことを糧に乗り越えていけたら、と思っています。

最後になりましたが、諸先生方、共に学び遊んだ仲間、いろいろ助けてくれたレギュラー生、先輩や後輩、影で支えてくれた両親に、心から感謝の気持ちを述べたいと思います。

本当にありがとうございました。

平成14年度　博士学位記授与者名簿

氏　　名	課程・論文の別	学位記授与年月日
柴田直美	課程博士	平成14年6月28日
奥野幸子	論文博士	平成14年6月28日
木谷隆子	論文博士	平成14年6月28日
梶野浩樹	論文博士	平成14年6月28日
小澤一広	論文博士	平成14年6月28日
加藤育民	論文博士	平成14年6月28日
澤村　淳	論文博士	平成14年6月28日
今村恵美	課程博士	平成14年9月30日
津田宏重	課程博士	平成14年9月30日
坂東伸幸	論文博士	平成14年9月30日
鈴木晶子	課程博士	平成14年12月25日
井内康之	課程博士	平成14年12月25日
田邊康子	論文博士	平成14年12月25日
折居史佳	論文博士	平成14年12月25日
柳川伸幸	論文博士	平成14年12月25日
大森博之	課程博士	平成15年3月25日
丹野幸恵	課程博士	平成15年3月25日
高　弼虎	課程博士	平成15年3月25日
小川研人	課程博士	平成15年3月25日
鈴木康博	課程博士	平成15年3月25日
榎本博之	論文博士	平成15年3月25日
上堀勢位嗣	課程博士	平成15年3月25日
小林厚志	課程博士	平成15年3月25日
平野淑子	論文博士	平成15年3月25日
三好恭子	課程博士	平成15年3月25日
潘　伯臣	課程博士	平成15年3月25日
渡邊行朗	課程博士	平成15年3月25日
谷口成実	論文博士	平成15年3月25日
中根　宏	論文博士	平成15年3月25日
今井浩二	課程博士	平成15年3月25日
浅井慶子	課程博士	平成15年3月25日
柳内　充	課程博士	平成15年3月25日
赤坂伸之	論文博士	平成15年3月25日
堀川良高	課程博士	平成15年3月25日
佐々木麻衣	課程博士	平成15年3月25日
辛　　風	課程博士	平成15年3月25日
大水信幸	課程博士	平成15年3月25日
阿部麻美	課程博士	平成15年3月25日

平成14年度　修士学位記授与者名簿

氏　　名	学位記授与年月日
志賀加奈子	平成15年3月25日
原口眞紀子	平成15年3月25日
山本美紀	平成15年3月25日
高橋美和	平成15年3月25日
千代慶子	平成15年3月25日
児玉眞利子	平成15年3月25日
田端五月	平成15年3月25日
松本　泉	平成15年3月25日

夕映えの大雪山系

生化学第一講座　教授　谷　口　隆　信

平成14年10月16日付で旭川医科大学生化学第１講座に赴任いたしました。来た頃は丁度紅葉がきれいで、有名な層雲峡とやらに行ってみようかと思っていたところが、すぐ雪が降り始めあっという間に氷の世界になってしまいました。確かに日本で一番寒いところだと聞いてはいましたが、こちらの雪は融けると言うことが無く堆積するばかりで、雪国の福井の生まれにもかかわらず、これには往生しています。２月の終わりになって陽射しも随分力強くなってきましたが、最高気温が氷点下の日が続いており春が待ち遠しいことです。雪が溶けると、梅や桜、ツツジに果てはコスモスまで一斉に花が咲くそうで、百花繚乱の季節を楽しみにしております。教室は８階にあり、窓からの眺めはすばらしいものがあり、時折、今の季節ではまれだそうですが、真っ白な大雪山系が一望にできることがあります。夕映えの時など時間を忘れて眺めてしまい、気がつくともう暗くなっていて、ツインハープの橋を渡る車のライトの列にふと我に返ることがありました。

さて、私は卒後泌尿器科医として但馬の豊岡病院、大阪の北野病院と順調な臨床生活を送っていたのですが、学位を取りに基礎に入ってサイエンスの道に迷い込み、気がついら旭川にたどり着いていたというのが正直なところです。私は臨床時代から癌を何とかしたいと思い、基礎においてもチロシンキナーゼ、遺伝子インプリンティング／メチル化、受容体といろいろな方面から癌の攻略を目指して参りました。しかしながら癌は伊達に死因第一位の病ではなく、まだまだ歯が立たないと言うのが現状です。ただ、最近になって質量分析を代表とする解析手法の進歩やコンピューターを駆使した特異的薬剤設計などによって、白血病や肺癌においてチロシンキナーゼ阻害剤が臨床応用されるようになってきており、癌化のメカニズムが少しづつではありますが見えてきたと感じています。私もここでもう一踏ん張り癌攻略を中心に研究を行いたいと思っています。

先代の藤沢名誉教授はカルモジュリンキナーゼが御専門であったこともあり、旭川医大第１生化学講座はいわゆる伝統的な生化学／酵素学がよく保存された教室だと思います。分子生物学が全盛となっている今日、基礎系各講座で形態は解剖、パッチは生理、精製は生化といったような棲み分けはほとんど無いのですが、やはり壁にぶつかった時にはそれぞれの原点に立ち返ってみる必要があります。私もチロシンキナーゼの精製で学位をもらっていて、それだけに精製というのはやりたくないのですが、必要があればいつでも蛋白質の精製に取りかかれるという教室で、有難い御縁だったと感謝しています。最上階の教室ということで、これも神さんの思し召しとできるだけ階段を使って脚力、心肺機能を鍛えようと思っています、６階辺りから無我の境地に入れますので、何か良いアイディアでも浮かばないかと期待しているのですが・・・。巷にあふれている糖尿病、高脂血症、高尿酸血症などの代謝病変は、今の飽食の時代における必然であるとthrifty genotype hypothesisは言っているわけですが、生化学の講義の中でもこのような現代社会を見据えた話題を取り上げて行くつもりです。現在死因の半分以上を占めているのは血管病変（心臓／脳）と癌であり、この意味では階段登りのような運動と禁煙が現代社会の健康問題の改善に最も手近で合理的であり、学生諸君にもこのような点を訴えていきたいと考えています。旭川医大の皆様方の暖かい御支援をお願いしたいと存じます。

救急部教授に就任して

救急医学講座　教授　郷　一　知

1996年に本学附属病院救急部の副部長・助教授に就任し、第1内科菊池教授、次いで泌尿器科八竹教授に部長としてご指導いただき、本院の救急医療体制の整備を少しずつ進めてきておりました。2002年４月に本学に救急医学講座が新設され、2002年12月16日付けで救急医学講座の教授を拝命いたしました。

私は1980年に北海道大学卒業後，救急部開設直前の札幌市立病院に麻酔科医として１年間勤務しました。緊急に備えて挿管セットを入れた鞄を枕に麻酔科の３人の医師で交代で当直したことが思い出されます。このたび再度救急に携わることになる遠い伏線だったような気がします。卒後２年目は市中病院で一般外科の研修、３年目から３年間は大学で外科全般の研修を受けました。研修後は、循環器外科を志しましたが、当時はすぐ手術に入れず、人工心肺、血液浄化、開心術の周術期管理に明け暮れる数年を過ごしました。1988年から90年までは米国で心臓外科の臨床を経験しました。帰国後、本学第１外科の久保教授（現在の学長）のもとで心臓外科を続ける機会を頂き、91年に本学に参りました。以後10年余心臓外科を続けて参りました。

こうして振り返ってみますと、ヒトの生死に直接関わる分野での臨床を続けてきたことが、今後救急医療に取り組んで参ります上で，大変貴重な経験となったような気がいたします。また、近年、小児の救急医療の問題がクローズアップされることが少なくありませんが、先天性心疾患の外科治療に深く取り組んできたことが、このような問題の解決の一助になればと願っております。

救急医学講座の開設が急に許可されたことの背景には、「全人的な医療」や「緊急の対処」ができる医師を要求する世論と、これに対応し医学部卒業後２年間を臨床研修にあてようとする厚生労働省の意図があったことは否めません。つまり、本学の救急医学講座は開設と同時にそのような医師の教育の責務を負っているということになります。

私自身は、環境に恵まれ、20年余にわたり広い分野にわたった研修をしてくることができ、現在も研修中のような気持ちでいます。しかし、この研修は，系統だったものではなく、全体を見渡すのに時間がかかり過ぎた（20年以上）という残念な部分もあります。できることなら、次の世代の医師には、系統的な研修の中で、できるだけ短期間で先人の経験を引き継ぎ、国際的にも認知されうる技量を身につけ、日本の医療を文字通り「飛躍」させてほしいものです。

臨床研修、臨床教育は、多数の患者さんの来院がなければ効率的に果たすことはできません。救急部で多くの患者さんの診療を行うためには救急部の体制強化が必要なことは論を待ちませんが、同時に、病院全体が、刻々と変化する患者さんや社会の状況に対応できるよう活性化されていることが不可欠です。大学と病院全体のご協力が必要です。集中治療部や総合診療部との連携や、臨床診療各科のご指導をお願いする機会が激増することと思います。この場をお借りして益々のご指導を賜りますようお願い申し上げます。

救急医学講座の現在のスタッフは、私と藤田助教授と津田助手です。藤田先生は本学麻酔科で指導的立場で活躍され、救急医療の経験が豊富です。津田先生は小児科で心疾患の治療に専心されてきており小児の救急医療の分野にも活躍していただけるものと思います。本院の救急受け入れの拡大と充実、卒前教育と卒後研修の準備、市内の医療施設や救急隊との連携強化、が私どもの焦眉の任務であり課題です。また、若く野望を持った先生方にこの分野に参加していただけるように、早急に救急医学や集中治療の認定に資することのできる施設にしていきたいと考えています。

最初から強力なスタッフを得て難関に向かうことができますことを、本学の皆様に感謝申し上げます。

教授就任のご挨拶

看護学講座　教授　松　浦　和　代

昨年12月16日付けで教授に昇任し、発達障害看護学を担当させていただくことになりました。私は平成10年４月に旭川医科大学へ赴任いたしましたが、これまで５年間にわたりご指導下さいました方々に心からお礼を申し上げ、また今後もよろしくお願い申し上げる次第です。

私は小児看護学を専門としてまいりました。ここ二十数年の未熟児医療・新生児医療や、小児疾患の治療成績の向上には目を瞠るものがあります。かつては救命しえなかった生命が治癒あるいは寛解を得て小児期を生存し、青年期・成人期に達するようになりました。これらの青年・成人を、キャリーオーバーと呼んでいます。

キャリーオーバーは、先天奇形・小児がん・先天性心疾患・1型糖尿病といった小児疾患を起点に受療を開始しますが、彼らが成長・発達の過程で直面する困難は、疾患から派生する身体面の問題だけではありません。医療・教育における研究の蓄積は、キャリーオーバーが、就学、進学や就職といった社会的自立の課題達成に多くの問題をかかえやすいことを指摘しています。

さらに、彼らがリ・プロダクティブ世代に達しつつあるという動向も新たな問題を示唆するものです。殊に遺伝子診断の在り方は、キャリーオーバーの妊娠・出産をめぐる意志決定に大きな影響を及ぼすことは言うまでもありません。

キャリーオーバーに対する医療は、現在、小児総合医療の発展形である成育医療の枠組みに位置づけられています。成育医療とは、将来を担う世代の健全な育成を目的とする医療であり、平成14年度に開設した国立成育医療センターが、わが国における成育医療の推進力としてその役割を果たしていくことになりました。国立成育医療センターは、小児医療、母性・父性医療および関連・境界領域を包括する医療を展開し、小児医療を質的に転換させることが期待されています。看護学雑誌「小児看護」も、昨年11月に「成育医療と看護-小児看護から成育看護へ」という特集を組み、多いに話題となりました。

こうした「成育」の概念を基に、私は発達障害看護学を展開したいと考えています。発達段階別に区分された従来の視点ではなく、胎児期から新生児期、乳児期、幼児期、学童期、思春期を経て青年期・成人期へといたる長期的な視点から、対象者の成長・発達、健康問題の変化（事例によっては急速な老化）をとらえ、自立を支援していく看護を検討していきたいと考えています。

また、障害や先天性疾患をもつ子どもの両親に対する育児支援も重要な課題のひとつです。虐待のハイリスク要因には、親側の要因、環境要因、そして子ども側の要因の３つがあげられます。未熟児出生、低体重、先天性疾患や障害などは子ども側のハイリスク要因であることを深く認識し、家族支援を検討していかなければなりません。

以上、発達障害看護学という講義の中で、私が学生の皆さんと討論していきたいことを述べてみました。発達障害看護学はまだ教科書のない科目です。皆さんと共に意欲的に挑戦していきたいと考えています。

教授就任のご挨拶

総合診察部　教授　奥　村　利　勝

平成14年12月16日付けで本学附属病院総合診療部を担当することになりました。
この機会をおかりして自己紹介をかねて就任の御挨拶をさせていただきます。私は釧路市出身で本学を昭和59年に卒業した６期生で、本学の大学院で神経生理学について勉強いたしました。その後、本学の内科学第３講座で消化器病、心身医学、糖尿病の臨床と研究に従事してまいりました。この間平成４年から６年には米国Duke大学に留学しました。自分の興味は一貫して中枢神経が消化器機能や心身症の病態、糖代謝にどのように関与するのかが中心でありました。すなわち、脳と臓器相関の観点から生体機能を意義付けることを意識して研究し、その目で実際の診療にあたってまいりました。このことは、高度に専門化した臓器別診療を相補するために必要であることが叫ばれている全人的医療を実践する上で役立つものと確信しております。

総合診療部は病院の中央診療部門に新設された部門で人間で言えば新生児にあたりまだ首もすわっておりません。成人して社会に貢献できるまでは少々時間がかかるかもしれませんが、一日も早い成人式を夢見ております。総合診療部とはどんなところですか？との質問は病院内外からよくされます。最近、数十の大学病院また一般市中病院に総合診療部または総合診療科が併設されてきております。これらの多くは患者振り分けの窓口としての機能を有していると伺っております。しかし本院に総合診療部ができた経緯はその機能のみならず、病院の将来構想の一つである地域医療総合センターが構築された場合にその中核として機能するためと理解しております。その名の示す通り、関連地域の医療を充実させること、そして本院で行われている専門診療科による診療体制が益々活性化するようにすることが任務であると考えております。この任務を遂行するためには?ーワード"連携"があります。すなわち、病院外の地域基幹病院や診療所との連携と院内の各専門診療科との連携が重要であります。加えて、全人的医療の実践が必須で米国で言いますfamily medicine, primary careの観点から診療に当たることが重要と考えております。これまで、日本の医学教育の中にfamily medicine, primary careが重要であることの認識は薄く、日本はその分野の後進国でありました。しかし、どこかで始めなければこの分野が根付くことはありません。今回旭川医科大学に総合診療部が設置されたのを機会に、この分野を旭川に定着させることを夢見ております。

私は在学中６年間ラグビー部に在籍しておりました。ラグビーは15人対15人での戦いですが、15人の担当ポジションはそれぞれ違い８人のフォワードと５人のバックスそしてそれらを仲介する２人のハーフ団からなります。フォワードがすばらしく強くても決定力のあるバックスのないチームは試合に勝てませんし、俊足のバックスを擁してもフォワードが相手から玉を奪えなければ試合になりません。ハーフ団はフォワードからでる玉をバックスに連なぐ役割を持ち、常勝チームには必ずといっていいほど判断力にすぐれたハーフ団がいます。本学には各専門診療科に華麗なステップをきるトライゲッターが多数おられます。総合診療部はトライにつながるパスやキックを多数供給できるハーフ団を目指しますが、時に自分自身で玉を持ち相手フォワードに突進したいとも考えています。このゲームに参加してくれる多くの若い仲間を募集しております。私は今まで本学で在学中および卒後を含めると20年あまりを過ごさせていただきました。今後はこれまでの恩返しができますように全力を尽します。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

一年を振り返って

医学科第１学年　二　村　麻　美

入学して早一年。受験勉強からも解放され浮かれていた春のことを思い出します。初めての一人暮らしということもあり不安を抱えつつ始まった大学生活ですが、慣れるのにそう時間はかかりませんでした。

一年を振り返って最も印象に残っているのはやはり早期体験実習です。入学後、医療について考えることが少なくなってしまっていた私にとって、医療に携わりたいという目的を再確認させてくれる良い機会となりました。また病院での実習を通してチーム医療という意味を実感させられました。医師だけでは医療の現場は成り立たず、多くの医療従事者の方々の力があって成立しているということを実際に目の当たりにしました。看護師の方のお話も聞くことができ医師のあるべき姿について考えさせられたりと、入学直後の知識のない時期の実習だからこそ何事も新鮮に受けとめ感じることができた気がします。でもやはり早く専門的な知識を得たいという想いが強くなった実習でもありました。

また、部活動の盛んなこの大学で私も初めて運動に挑戦することとなりました。部活を通して多くの親切な先輩達や部員と出会うことができ嬉しく思っています。部活というのはそれぞれ異なった考えや目的を持った人が大勢集まった団体なので運営していくのは、難しい面も多いということもわかりました。でもそのように多くの人が力を注いで一つの団体を作っている部活だからこそ、他人の意見を受け入れることや人間関係の作り方など将来においても必要な多くのことを自然と身に付けられるのではないかと思います。

大学生となりこれまでとは全く生活が変わった一年でしたが、残りの大学生活も濃いものにしていきたいと考えています。勉強はもちろんですが、今しか経験できないことをたくさん経験し、人間としての幅を広げていきたいと思います。

一年を振り返って

医学科第１学年　安　藤　義　崇

昨年４月に旭川医科大学に入学してから、もう既に一年が経とうとしている。月日が経つのはこれほど早いものかと驚き、焦りを覚える今日この頃である。

大学に入学してからの私の生活は一変した。入学前は岐阜という狭い世界の中で生活していたのが、突然ここ旭川まで来て一人暮らしを始めることになった。人間関係にしても、医学部という特殊な学部だけに年代も経験も様々な人たちが全国から集まってきており、このような環境の中で、初めて知ることや学ぶことも多く、入学当初は大変新鮮で充実した毎日を送ることができた。

しかし、完全に大学生活に慣れてしまった今、大学へ行って講義を受け、帰ってきて家で過ごすというような、大学と家の間を往復するだけのワンパターンな毎日を送っているにすぎず、新鮮味に欠けるものになってしまった。さらに大学の講義にしても、最初は医学部の講義はとても新鮮で興味が湧き、集中して講義に臨んでいたのだが、やはり講義は難しく、なかなか理解できないものもあって、最近では入学当初の熱意が次第に失われてきたように感じていたのだ。

そんな中、先日ある機会で、大学に入学したばかりの頃の写真に出会った。その写真に写っている入学当初の自分を見ていたら、「努力して立派な医師になるんだ！」という熱意に満ちていた当時の自分が思い出されてきた。そして、ただ単に毎日を消化しているにすぎない今の自分が情けなく思えた。一生懸命勉強して医師になるという初めの志を今もう一度思い起こす必要があると感じた。

この文章を書いている今、私は後期試験の勉強に終われる生活の最中である。これから学年が上がるにつれ、学ぶ内容も難しくなり、量も膨大なものになっていくだろう。この先くじけそうになることもあると思うが、そのときは初心を思い返し、医師になるという目標を見失わずに頑張っていきたいと思う。

「1年を振り返って」

看護学科第1学年　片　寄　さやか

私が期待と不安を抱えてこの旭川に来てから、もう1年が経とうとしています。この1年を振り返ると、とてもたくさんのことがありすぎて、あっという間に過ぎてきました。この医大での生活の中で見るもの・聞くものはすべてが新鮮で、毎日を楽しく過ごしてきました。

4月の入学式・新歓合宿での部活動の勧誘や6月の医大祭では、高校とは全く違う大学のすごさに圧倒されました。後期に入る頃には大学生活にも慣れ、自分の生活のペースができてきた時期でしたが、後期は多くの実習が私を待っていて、慣れないレポートに悪戦苦闘をする日々が続きました。その多くの実習の中でも特別なものは、やはり基礎看護学実習です。実際に病院へ行って患者さんや看護師さんと接し、学内の講義や演習だけでは学ぶことができないことをたくさん学ぶことができました。実習中に指導してくださった看護師さんの「患者さんの為に何かをしてあげたいと思う気持ちをいつも忘れないで」という言葉は今でも心に残っています。自分が看護の道を選択したことに自信をなくしたときは、この言葉を思い出して前に進もうと思います。

この1年間には、楽しいことはもちろん辛いこともありました。しかし、それを一緒に乗り越えてきたたくさんの友達がいます。自分一人だけではただ「辛い出来事」で終わっていたかもしれないけれど、周りの友達が支えてくれたことで、逆にその辛いことが「よい経験」になったのではないかと思います。自分とは違う考えを持った人たちに刺激されて生活してきたこの1年は、友達の大切さを再確認した1年でもありました。

私の学生生活はあと3年ですが、きっとあっという間に過ぎていくと思います。3年後に今までの大学生活を後悔しないように、私の周りにいる人や多くの出来事から色々吸収をして充実した生活を送っていきたいです。

「今年1年を振り返って」

看護学科第1学年　原　谷　俊　治

1年はとても早かった。ついこの間入学して、緊張した毎日を過ごしていたはずなのに、いつのまにか、2年生になろうとしている。何があったのだろうかと今思い出そうとしても、なかなか言葉が出てこない。そういう気持ちがあるということは、思い出を残すヒマもないほど充実した1年を送っていたのだろう。この1年をしいて言うならば、「驚き」の1年である。

まず、第一の驚きは入学式翌日の合宿だ。わけのわからない1年生に対し、部活動のすさまじい勧誘と「飲め！飲め！」という掛け声に調子に乗ってしまった私は、気づくと便器と供に朝を迎え、帰りのバスの揺れに頭痛と吐気！「昨日はいったい何をしていたのだろう？」と、「この携帯に入っている名前と番号はいったい誰のなんだろう？」という疑問は未だに解消されないままである。

学校生活においては、授業のあり方とテストである。高校の授業とは全く異なり(ギリギリで合格した私にとっては、すごくうれしかったのだが)、出席も誰かに代返してもらえれば出席となることに衝撃を受けた！その甘さとは裏腹に、テストはぶあつい教科書1冊と、テスト期間の長さに何度「ありえない！」と感じたことだろうか。毎日が睡魔との戦いだったと思う。前期は、それでも暇な時間も多く、部活や遊びに熱中していたが、後期は実験とレポートの連続でかなりきついものだった。特に、生物のスケッチにおいては、私の才能を誰も理解してくれず、「とし～、ちょっとみせて～！」と見せた後には必ず「としと似てないから安心して提出できるわ。ありがと。」と、残酷な言葉をかけて行くのだ。そして最後まで残っているのは、いつも・・・。看護科という男の少ない世界の中で、こうして皆が可愛がってくれていることで私はこの1年を楽しく過ごせたと思う。

人はやはり一人ぼっちでは生きていけないということがわかった。孤立して一人ぼっちでは、これまでの数々の困難を乗り切ることは不可能だったと思う。これからもまた、辛いことや悲しいこと、悔しいことに何度も直面すると思うが、今まで私を支えてくれた仲間がいれば、どんなことでも乗り越えていけそうな気がする。「みんな、ありがとう！これからもヨロシク！」

研　究　室　紹　介

内科学第二講座　講師　横　山　和　典

当講座（第二内科）は昭和49年、石井 兼央教授のもとに発足し、昭和63年より牧野 勲教授（現附属病院長）が第二代に着任して現在に至ります。

第二内科には４つの研究groupがあり、臨床・研究を専門的に行っています。肝臓group（中村助教授）はウィルス性肝疾患や自己免疫性肝疾患に対する治療や肝悪性腫瘍に対する画像診断、集学的治療法に関する検討、膵臓group（横山講師）は難治性な膵・胆道悪性腫瘍や各種消化器癌に対する診断、集学的治療法や急性・慢性膵炎の病態に関する検討、内分泌・膠原病・神経group（平野講師）は慢性関節リウマチ等の各種膠原病に関する病態解明や治療法、転写因子やグルココルチコイドの作用機序に関する分子生物学的研究、糖尿病group（網頭医師）は糖尿病合併症の発症機序や病態生理、特に糖尿病性神経障害に関する検討をテーマに臨床的、基礎的研究をおこなっています。第二内科の特徴は国民病といわれるウィルス性肝炎や生活習慣病である糖尿病等21世紀の日本人の健康を左右する疾患群や北海道には専門家が少ない膠原病・内分泌や膵・胆道疾患を診療分野として研究していることです。これらの研究成果が評価され、平成14年４月には第88回日本消化器病学会総会が牧野 勲会長のもと旭川で開催され、全国から4,000名の参加をみました。

第二内科は伝統的に家族的な雰囲気と書生臭い？理想を追い求める姿勢をモットーとしており、和気藹々としたなかに活発なdiscussionが日々行われています。研究時間外には代々継承されるrecreation leaderが音頭をとってキャンプや勧楓会、各種宴会も企画され、盛大に行われています。

新入医局員には、今年度から内科、外科、小児、救急をローテートする卒後研修が行われ、primary careを修得した社会に貢献する内科医を養成しています。

是非、皆さん第二内科で一緒に仕事をしませんか。

外国人留学生冬季交流事業実施される

２月21日(金)・22日(土)の両日に、平成14年度外国人留学生冬季交流事業が行われ、在籍留学生14名中８名と、その家族11名、職員３名の計22名が参加しました。

この事業は、北海道の冬のスポーツ、スキーを通して雪や寒さの中での楽しみを知ってもらうと共に、留学生同士の交流や「青年の家」を利用する研修生の人達とのふれあいを目的に、今年で３回目の実施でした。

今回は希望の多かった富良野スキー場まで足を伸ばし、初心者、ベテラン共に満足できたようでした。夕方からは大雪青年の家に移動し、交流会を行いました。和やかに話がはずみ、大学院４年生でこの３月に修了となる、潘　伯臣(ﾊﾟﾝ ﾎﾞｰﾁｪﾝ)さん、高　弼虎(ｶｵ ﾋﾞｰ)さん、辛　风(ｼﾝ ﾌｳﾝ)さんの３人もスキーや、日本での思い出話に花を咲かせておられました。

次の日には、殆どが大雪青年の家でスポーツや他の研修生の人達との交流に参加し、有意義な時間を過ごしました。

（学生課）

平成14年度　1年のあゆみ

3月29日　看護師国家試験合格発表
（本学合格者56名、合格率98.2%）
保健師国家試験合格発表
（本学合格者52名、合格率76.5%）
助産師国家試験合格発表
（本学合格者３名、合格率100%）

4月

5日　平成14年度入学式
医学科新入生　95名
看護学科新入生　60名
看護学科第３年次編入学生　10名

入　学　式

8日　前期授業開始
15～16日　看護学科新入生合宿研修
17日　定期健康診断
22～23日　医学科新入生合宿研修
24日　定期健康診断
25日　医師国家試験発表
（本学合格者98名、合格率93.3%）

5月

15日　定期健康診断
22日　定期健康診断

6月

14～16日　第28回医大祭
医科フェスタ2002

医　大　祭

28日　博士学位記授与式
博士学位記被授与者　７名

7月

8日　合唱部　サマーコンサート(附属病院)
13～16日　第49回北海道地区大学体育大会
当番大学：旭川医科大学
本学参加種目：陸上競技(男女)、準硬式野球、ソフトテニス(男女)、バスケットボール(男女)、バレーボール(男女)、サッカー、卓球(男)、バドミントン(男女)、剣道(男女)、弓道(男女)
成績：優勝、弓道(男)
準優勝、バレーボール(男)、ソフトテニス(女)
第３位、準硬式野球、ソフトテニス(男)

北海道地区大学体育大会

25日　平成14年度医学科第２年次後期編入学者選抜試験
7月28日　第45回東日本医科学生総合体育大会(夏季部門)
～8月14日　総合主管大学：東京医科歯科大学
本学参加種目：陸上競技(男女)、準硬式野球、テニス(男女)、ソフトテニス(男女)、卓球(男女)、バレーボール(男女)、バドミントン(男女)、サッカー、バスケットボール(男女)、柔道、剣道、弓道、空手(男)、水泳(男女)、ハンドボール、ゴルフ(男女)、ラグビー
成績：優勝、バレーボール(男)、バドミントン(女)、バスケットボール(男)、ゴルフ(女)
準優勝、バドミントン(男)
第３位、弓道
総合優勝、旭川医科大学

東日本医科学生総合体育大会

29日　オープンキャンパス
31日　平成14年度医学科第２年次後期編入学者選抜試験合格者発表

8月

16日　外国人留学生夏季オリエンテーション(旭山動物園)
参加者　留学生９名、留学生家族３名

外国人留学生夏季オリエンテーション

21～22日　平成14年度公開講座
「腰にやさしい介護と看護」
受講者参加型
28日　体育大会(学生主催)

9月
25日　平成14年度解剖体慰霊式

解剖体慰霊式

28日　平成15年度看護学科第３年次編入学者選抜試験
30日　博士学位記授与式
博士学位記被授与者　３名

10月
1日　平成14年度医学科第２年次後期編入学生入学式
7日　平成14年度公開講座
～11月７日　「老年医学の最前線－生活習慣病－」

公　開　講　座

9日　平成15年度看護学科第３年次編入学者選抜試験合格者発表
12～13日　平成15年度ＡＯ入試
23日　平成15年度ＡＯ入試合格者発表

11月
5日　本学記念日
9日　室内合奏団、合唱部　子供ｺﾝｻｰﾄ(附属病院)

子供コンサート

16日　平成15年度大学院修士課程看護学専攻入学者選抜試験
20日　平成15年度大学院修士課程看護学専攻入学者選抜試験合格者発表
23日　平成15年度推薦入学者選抜試験

12月
4日　平成15年度看護学科推薦入学者選抜試験合格者発表
20日　平成15年度大学院博士課程外国人留学生入学者選抜試験
21日　ギター部、ブラスアンサンブル、合唱部クリスマスコンサート(附属病院)
25日　博士学位記授与式
博士学位記被授与者　５名

1月
8日　平成15年度大学院博士課程外国人留学生入学者選抜試験合格者発表
18～19日　平成15年度大学入学者選抜大学入試センター試験

2月
12日　平成15年度医学科推薦入学者選抜試験合格者発表
14日　平成15年度大学院博士課程入学者選抜試験
21～22日　外国人留学生冬季交流事業
(富良野スキー場、大雪青年の家)
参加者　留学生９名、留学生家族11名
25日　平成15年度第２次試験(前期日程)
26日　平成15年度大学院博士課程入学者選抜試験合格者発表
28日　外国人留学生との懇談会及び交流会

外国人留学生との懇談会

3月
6日　平成15年度第２次試験(前期日程)合格者発表
12日　平成15年度第２次試験(後期日程)
20日　平成15年度第２次試験(後期日程)合格者発表
25日　平成14年度学位記授与式
学士学位記被授与者157名
(医学科92名、看護学科65名)
修士学位記被授与者　８名
博士学位記被授与者　23名

クリスマスコンサート　3題

私たちギター部は、12月21日(土)にクリスマスコンサートを行いました。

今回は、卒業生４人を含む部員14名で、計18曲の演奏会となりました。

私たちはクラッシックギターだけでなく、エレキギターやベース、ピアノやその他パーカッションを用い、また、曲によってはボーカルを加えるなどして、日々活動しております。

今回は、クリスマスということもあり、B'Zのいつかのメリークリスマスで始まり、ビートルズ、エリック・クラプトン、キャロルキングなどの曲を演奏しました。

お忙しい中、コンサートに来て頂いた皆様に感謝しております。次回は、夏にロビーコンサートを予定しております。機会がございましたら、ぜひお越しください。

(ギター部部長　吉澤　門士)

私たちブラスアンサンブルは、12月22日(日)附属病院ロビーにてクリスマスコンサートを行いました。

子供から大人まで多くの方にご来場いただき、盛大に行うことができました。

今回は、聴いても観ても楽しんでいただくために選曲はもちろんのこと、サンタクロースをはじめトナカイ、トトロ、ドラえもん、慎吾ママetc…などに仮装をするなど工夫を凝らしました。曲目は、昭和50年代日本レコード大賞曲のメドレーをはじめ、ジブリ作品のメドレー、クリスマスの曲など計8曲を演奏しました。

途中演奏が止まりそうになるなどハプニングもありましたが、聴きに来てくださったみなさんには楽しんでいただけたようでした。

(ブラスアンサンブル部長　前田　忠)

12月23日(月・祝)病院ロビーにて合唱部のクリスマスコンサートを開催しました。毎年この時期に行っているこのコンサートも、今年で16回目を迎えました。

このコンサートでは、クリスマスソングをはじめ、誰もが一度は歌ったことのある童謡など全12曲を歌いました。

コンサートの途中、サンタやトナカイが登場し、手作りのクリスマスカードを患者さん一人一人に配るという場面もありました。聴きに来てくださった方々のあたたかい笑顔に私達は励まされ、次のコンサートに向けて日々練習に励んでいます。

(合唱部部長　加藤　友美)

今回は「かぐらおか」の編集を担当している小生が所用で鑑賞できなかったので、３つの部の方にコンサートの模様をレポートしていただきました。

ご協力、大変ありがとうございました。

(学生課　細木)

新入生歓迎合宿のご案内

新入生歓迎実行委員長　伊　藤　彰　洋

皆さん御入学おめでとうございます。入学式の次の日から、つまり４月12日(土)13日(日)に新入生歓迎合宿が行われます。その中の行事としては、学校で学校案内と部活紹介、そして場所を移しホテルでの新入生同士での合同合宿などと内容の濃いものとなっています。「ときや亭」にて行われる合宿では新入生同士での交流をはかるのはもちろん、乱入という様々な部活による部活勧誘もあります。

これに参加したことにより入学後すぐに仲の良い友達ができたり、入る部活を決めたりした先輩方も多いようですよ。私たち新入生歓迎委員会は、新入生の皆さんが困ったこと、わからないことを全力でサポートします。参加は必須ではないですが、皆さんぜひ参加して下さいね！

学生教育研究災害傷害保険について

本学は、学生の正課中・課外活動中・通学中及び大学の授業等、学校行事又は課外活動で施設間移動中における災害事故補償のために「学生教育研究災害傷害保険」に全員加入しております。不幸にも傷害等の事故のあった場合は、速やかに学生課専門職員(厚生担当)に申し出てください。

平成15年度
前期分授業料免除及び延納・分納について

平成15年度前期分授業料免除及び延納・分納を希望する学生で、免除基準のいずれかに該当すると思われる者は、学生課専門職員(厚生担当)から必要書類を受け取り、申請期間内に提出してください。

免除基準の概要はつぎのとおりです。

○経済的理由で授業料納入が困難であり、かつ学力優秀と認められる場合

○授業料納期前６か月以内において学資負担者が死亡、又は風水害等の災害を受け、授業料納付が著しく困難であると認められる場合。

なお、免除基準については、公用掲示板に詳しく掲示してありますのでご覧ください。

また、不明な点は、学生課専門職員(厚生担当)に問い合わせ願います。

申請期間	在学生	平成15年３月31日(月)
(期限厳守)	新入生	平成15年４月25日(金)

平成15年度
日本育英会奨学生の募集について

日本育英会は、優秀な学生で経済的な理由で就学困難な者に学資を貸与しています。

本学では、日本育英会からの推薦依頼に基づき、出願者の種々の条件を考慮して選考を行い、日本育英会へ推薦します。ただし、日本育英会では奨学金貸与の種別ごとに推薦基準が定められており、その資格があっても採用枠の関係で推薦できない場合があります。

今年からインターネットによる申し込み方法(スカラネット)に変わります。

奨学生募集要項及び申し込み方法の説明会を4月14日(月)・15日(火)午後５時30分から第７講義室において実施します。希望者は集合してください。

なお、募集の時期以外に家計の急変により、学資の支弁に困難な事情が生じた場合は、専門職員(厚生担当)に相談してください。

医学生教育研究
賠償責任保険の加入について

この保険は、学生が正課中・学校行事及びその往復中で、他人にケガをさせたり、他人の財物を損壊したことにより被る法律上の損害賠償を補償する保険で、平成14年度から発足した新しい保険です。

医学科第５学年については、参加型臨床実習が始まりますので万一の場合に備え全員加入することとしております。

また平成15年度より医学科の新入生についても全員加入することとしており、入学手続きの際に加入手続きも終わっております。

その他の学年についても実験実習中や通学中の事故及び医大祭での食中毒事故等で損害賠償責任を負う可能性がありますので、ぜひ加入を薦めます。

特に看護学科においては、１年生から臨地実習が開講され患者や老人の介護等、人と接する機会が多くあります。そのため万が一に備え全員が加入することを強くお薦めします。

保険の掛金は１年間800円で、対人補償1億円、対物補償250万円が補償されます。

加入を希望する学生は、随時受け付けておりますので、学生課専門職員(厚生担当)に申し込んでください。

教官の異動

昇任	H14.12.16	救急医学講座	教授	郷　一知
〃	H14.12.16	看護学講座	教授	松浦　和代
〃	H14.12.16	総合診療部	教授	奥村　利勝
辞職	H14.12.31	放射線医学講座	講師	吉田　弘
昇任	H15.1.1	歯科口腔外科学講座	講師	竹川　政範
配置換	H15.2.1	アドミッションセンター	教授	坂本　尚志
昇任	H15.2.1	内科学第3講座	講師	藤本　佳範
〃	H15.2.16	救急医学講座	助教授	藤田　智
〃	H15.3.1	放射線医学講座	助教授	秀毛　範至

冬外

内科学第一講座
大崎能伸

そしてドラマが始まった

ワシントンDCにはケネディーセンターというホールがあり、ウィーン、ニューヨーク、ボストン、シカゴ、フィラデルフィア、チェコ、ロサンゼルスなどの名だたるオーケストラの名演を聴くことができた。ある日、ケネディーセンターに日本フィルハーモニーが来演するという記事をみつけた。アメリカの首都での演奏会は、観客が集まらないかと心配だった。「どうしてワシントンで日本フィルを聴かなきゃいけないのさ」といやがる妻を連れ出して、応援にでかけることにした。席は二階席の真ん中、チケットは安いが耳の肥えた常連客が入る場所である。メインプログラムは小林研一郎指揮のチャイコフスキーの5番。ロマンチックな名曲であるが、長いホルン独奏があり、アンサンブルの乱れが素人にもわかって台無しになる危険も多い。「これが日本フィル最後のアメリカ公演になるかもしれない」とドキドキしながら半分くらい観念していた。

ホールの中央に駐米大使が着席して、満席のもとでコンサートが始まった。失敗が心配で仕方なかったためか、最初の曲目は忘れてしまった。そしていよいよメインプログラム、ドラマが始まった。私の心配はものの数分で吹き飛んだ。溌剌とメロディーを奏でるバイオリン、どっしりと支える低音部、凛とした管楽器。たちまち小林研一郎の術中にはまって、ホール自体が感動していた。演奏する団員の息遣いまで聞こえるようであった。音のひとつひとつが自由にホールにあふれ，観客は息を飲んでいた。

こっそりとプログラムを確認する観客が音を立てないように注意されていた。コンサートでは初めての経験であるが、第一楽章が終わると大きな拍手が沸いた。ホルン独奏では，耳の肥えたワシントンの観客が震えて泣いていた。曲が終わって、一瞬の静寂の後のブラボーコールはやむことがなかった。

綿密に練り上げられた緊張感に溢れるチャイコフスキーのあとは、和太鼓を交えた楽しい八木節がアンコールとして演奏された。日本のオーケストラとかヨーロッパのオーケストラとかを超えた、感動と満足感に満ちたコンサートの夜であった。